



地域社会のために活動する個人・団体を「サン基金」の助成金で支え続ける

岡山県 株式会社リー・グローブ (サンエイグループ) 「社会貢献福祉基金『サン基金』の助成事業等」事業



サンエイグループ代表 吉田清志さん

選考理由

障がいを背負った人々が生き甲斐をもって生きられるよう、約20年間にわたって多彩な福祉活動を行っている。その助成の手法も広く支援先を募り審査をして、支援を必要とする団体にパソコンや聴聴者用マイクなどを贈呈している。また、ボランティア活動を積極的に行い、アルミ缶飲料のプルタブを集めて車いすと交換するなど、その姿が地域の人々の障がい者に対する理解を深めるきっかけにもなっている。また、2018年の西日本豪雨災害に関しても山陽新聞社会事業団に寄付して支援の手を差し伸べている。

社会貢献活動審査委員会 委員
永井 多恵子氏



ボランティア活動や地域福祉活動に取り組む団体に「サン基金」の助成

お客様の「夢・感動・くつろぎ」を追求し、健全な憩いの場と温かいサービスを提供することにより、潤いのある豊かな地域社会の実現に貢献するという理念のもと、「サンエイ」「ジャンボ」のホール名で岡山県(7店)、山口県(5店)、滋賀県(1店)に13店舗を展開するサンエイグループ(ホール運営法人:株式会社リー・グローブ)。

同グループでは地域社会への奉仕を通じて、健康で豊かな未来社会を築く一員でありたいという願いから、2000年に「サンエイグループ社会貢献福祉基金(通称、サン基金)」を設立し、地域社会で様々なボランティア活動や地域福祉活動に熱意を持って積極的に取り組み、経済的援助を必要とする個人、諸団体に対して助成金を授与するとともに、福祉環境の充実等、基金の目的達成に必要な事業を行う取り組みを開始した。当初は、当時店舗を構えていた岡山県の岡山市、倉敷市、備前市、旧金光町の各地域に寄付を行う予定だったが、寄付だけでは用途が不明確であるとの理由から、「サン基金」を設立することになったという。

助成先として社会福祉活動に携わる小規模の団体等に重点が置かれているが、これは有名な団体・組織、大きな団体・組織は自分たちが応援しなくても資金的に余裕があると思われるため、小さなグループや個人でボランティア活動をしている方々を応援することで、自分たちも一緒



「サン基金」の申し込み案内書



「サン基金」の助成金授与式



プルタブ回収活動により贈られた車いす

に活動できるという理由からである。「サン基金」の助成は同グループの店舗がある岡山・山口・滋賀県と県ごとに申し込みの受付が行われるが、2018年度は3県から90件の応募があり、43団体に対して計886万円が助成された。なお、これまでに729団体に対し、1億3,397万円が助成されている。

選考委員会の厳正な審査で助成先決定 プルタブ回収で車いすの交換・寄贈も

助成先の決定にあたっては、希望する団体からの申し込みを受け、同グループ13店舗の店長、本部の幹部社員、取締役役員、サン基金最高顧問から成る選考委員会が一次審査(書類審査)、さらに一次審査通過者に対する二次審査(面接会)を行って授与団体を選びだす。審査において重視されているのは、活動に対して熱意を持って積極的に取り組んでいること、真に経済的援助を必要としていることを選考委員が感じることで、恒常的な運営費用(事務所光熱費や人件費など)ではないこと、助成によって活動や事業が成立できるもの、すべてが助成頼みではないことが、助成決定のための条件となっている。

助成を受けた団体は助成金の効果や目的達成の程度がわかる活動報告書を提出することになっているが、「サン基金」の運営・実施主体としては、関係者が授与式(2018年度は4月に実施。約300名が参加)終了後の5月ごろから年末にかけて、団体の活動に参加したり、物品の使用状況などを視察しているという。

「サン基金」の他にも、同グループでは2006年度から入社して2~3年の若いスタッフが中心となり、アルミ缶飲料のプルタブを回収して車いすと交換する活動を行っており、これまでに岡山・山口・滋賀県の福祉施設などに計16台を寄贈している。さらに同グループでは、2018年7月に発生した西日本豪雨災害に際し、義援金として300万円を山陽新聞社会事業団に寄付している。